

主事



浄寫

校合

發日

八月五日



廿七年八月三日

主務

立案者

大臣

次官



經理局長



第三課長



課僚



軍務局長



第一課長



訓令案

室蘭港當省用地使用及海面埋立之儀北海道炭礦鐵道株式會社之長ヨリ出願ノ件ニ付別紙甲乙号ノ通り内務省ト往復ノ末丙号ノ通り同省ヨリノ回議ニ對シ

房第 八五〇号

毎

頁

1859

同意致置候条此旨心得へし

明治廿七年八月五日

大臣

横須賀鎮守府司令長官
横須賀鎮守府監督部長

1860

甲第五一五号

議書内務省ニ送送 八月一日

明治二十七年六月廿五日

土木局長○

治水課長○

土木技監○

庶務局長○

地理課長○

大臣○

次官○

参事官○

縣庁局長○

北海道課長○

海軍省

大臣

次官○

主事○

經理局長

官房第八五〇号

毎

宣



本件
印
付

印

送八月一日

治水課長の

地理課長の

長〇

〇

毎

直



本件異存無き也
明治三十七年七月廿五日

軍令部



1862



八月一日

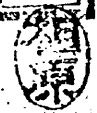
治水課長の

御座います
御座います
御座います

女〇

〇

毎



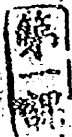
御座います
御座います
御座います

御座います
御座います
御座います

御座います
御座います
御座います

御座います
御座います
御座います

御座います
御座います
御座います



御座います
御座います
御座います

1863

第三課長

海軍省用地使用及公有水面埋立等

使用願ニ付稟申

公有水面使用願ニ對シテ使用料及命

令書ノ義ニ付稟申

北海道廳

本件ハ北海道ノ石炭鐵道株式會社於テ鐵道布設
ノ為メ海軍省用地使用及公有水面埋立等ニ棧橋架
設ニ付海面使用ノ義係セテ出願稟申セシモノニ有テ
依テ取調書處方ニ就テハ別紙參照ノ通既ニ評
可セラレ、下ニ決定相成居別ニ右支無クハ存案間
官有地取扱規則第廿一条及第廿二条ニ依リ聽許ヲ感
可ト哉左ニ指令按相伺奉也

按

北海道廳

本年五月四日第四五〇号ノ旨申海軍省用地使
用花ニ公有水面埋立及使用願之件花三月二日第
五六七號ノ旨申公有水面使用願ニ對テ傳用料及
命令書之件聽届ク

但公有水面使用命令書第廿一條中第廿七條トア
ルハ第六條ノ誤ナリト認ム

年月日

内務大臣

海軍大臣

1865

甲第九九号

此邊居地約計四五町之

海軍省用地使用量ニ公有水面埋立並ニ

使用額ニ付稟申

膽振國室七間郡札幌通

海軍省用地之内別紙圖面之通

一三萬七千九拾壹坪八合九勺五才 使用額地積

内譯

第一号

三萬三千四百拾壹坪四合七勺

第二号

(隧道)

七百方拾貳坪七合三勺五才

第三号

千五坪八合

第四号

千五百拾壹坪五勺三才

第五号

三百八拾八坪九合五才

全國全部ニ於テ別紙圖面ノ箇所

頁

1867

一海面六萬六千九拾四坪七合五勺八分 埋立出願面積

内譯

第壹号

八百七拾四坪六合五勺三分

第貳号

六萬五千五百拾四坪七勺五分

全上

一海面貳千六百六拾九坪五合六勺三分

棧橋架設ノ爲メ使用出願面積

右海軍省用地内鐵道敷地トシテ使用并ニ

海面埋立及使用ノ義北海道炭礦鐵道

株式會社社長ヨリ出願之處右ノ從來ノ鐵

道線路ヲ延長スルカ爲メニ必要ナルモノニシテ

該事業業ヲ几特リ同會社營業上ノ消長ニ

關スルニシテ亦本道ノ拓殖上尤モ必須ノモノ

1868

夕儿コトハ既。客年九月二十一日付ヲ以纏々前系
 申及置案次第ニ有之而シテ海面ノ埋立
 ニ就テハ本年正月三日付ヲ以テ上申ニ及案通同
 港民ハ勿論因港惣代人會ニ於テモ何等
 異議無之殊ニ埋立出願ノ箇所ハ過半遠
 浅ナルヲ以テ之ヲ埋立候得ハ船舶ノ航通淀泊
 上ニモ利益アル義ニシテ公益上ニ於テ何等支障
 ノ虞無之又海面使用ニ就テハ是亦何等支障
 ノ義無之候条若河レモ特ニ御認可相成度尤
 七埋立地ノ内乙号ノ圖面ノ通運河道踏花ニ物揚
 場ヲ施設セシメ官有ト為ス於テハ該海岸地
 ノ共同物揚及一般人民通行上最モ便宜被
 存候得共豫メ地積ヲ確定難致依テ成功

1869

ノ上更ニ實測ヲ遂ケ之ヲ確定致度又海面使用
ノ義ハ港内取締規則施行地ニ付使用料及
軍令書ヲ要セズ海軍省用地使用料ハ評價
書ノ金額ヲ以テ相當ト被存候依テ各軍令書按
花ニ圖面及使用料評價書謄本ヲ添ハ此段稟
申度也

明治廿七年五月四日

北海道廳長官北垣國道

白鷺大臣伯耆井上毅審殿

1870

命令書

北海道炭礦鐵道株式會社

社長 氏 若

明治 年 月 日 願 膽 振 國 室 蘭 郡 札 幌 通
於 海 軍 省 用 地 內 鐵 道 敷 地 上 之 用 件
認 可 候 條 左 之 條 項 ヲ 遵 守 ス 云

明治 年 月 日 北海道廳長官

第一條 海軍省用地内使用認可ノ位置及區
域ハ 別 紙 圖 面 通ニ 記 于 其 地 積 ハ 壹 万 七 千 九
拾 壹 坪 八 合 九 勺 五 分 云々
第二條 前 條 地 內 鐵 道 敷 地 外 他 之 目 的 使 用

其 實

スレトヲ得ルモトス

第三條 使用期限ハ認可ノ月ヨリ滿三ヶ年トス

第四條 使用認可地ノ保存並修繕及其之ニ要

スル費用ハ該テ會社ノ負担トス

第五條 使用料ハ一ヶ年十坪ニ付金五拾圓トス

第六條 鐵道布設工事中ハ本廳ノ監督ヲ受

シテ

第七條 海軍省ニ於テ使用認可地ノ必要ニ場

合ニハ何時ニテモ無償ニテ線路ノ變更ヲ命ジ

又ハ該地ヲ令テスレトアルベシ

第八條 工事中公害ヲ生シ又ハ生スル虞アリト認

メタルトヤハ何時ニテモ會社ノ費用ヲ以テ之ヲ豫防

スルベシ

1872

ヲ為ケシモノ若クハ工事ノ變更ヲ命スルコトアルベシ
第九條 土地ノ使用權ハ擔保貸付ニ供シ又ハ他ニ轉
移スルコトヲ得ス

第十條 使用期限中ト画法律命令ノ施行ニ依リ
又ハ軍事上及公益上官ニ於テ必要ト認めルトキハ何
時ニテモ急償ニテ此命令書ノ條項ヲ増減變更スルコ
トアルベシ

第十一條 會社ニ於テ此命令書ノ條項ニ違背シタ
ルトキハ是ヨリ生シタル損害ハ之ヲ賠償セシムヘキハ勿
論急償ニテ事件土地使用權ノ消滅ニ直チニ
及地セシムコトアルベシ

第十三條 第七條第十條又ハ第十一條ノ處分ニ依リ
使用權ヲ喪ヒ又ハ該權ノ行使ニ變更ヲ來シヨ

1873

凡トキハ其地内ニ現存スル軌鉄其他ノ私有物ハ會
 社ノ費用ヲ以テ官ノ指定スル期限内除却ニ原
 狀ニ復スルニシテ若シ期限内除却セザルトキハ官ニ於テ之
 ヲ除却シ其費用ハ會社ヲ追徴スルニ
 會社解散及使用期限満了ノトキニ於テモ前項
 ヲ適用ス

命令書

北海道炭礦鐵道株式會社

社長 氏 名

明治 年月 日 願 膽 振 國 室 岡 郡 室 岡 港 二
於 予 公 有 水 面 埋 立 一 俾 認 可 案 條 左 之 條 項 日
遵 守 之 也

明治 年月 日 北海道廳長官

第一條 埋立、位置及区域ハ此命令書ニ添付スル
圖面ノ箇所第壹番地籍ノ百七拾四坪及合五十三
第貳番地籍ノ百五拾五坪ハ其ノ内ノ百五拾五坪ヲ以テ
第二條 埋立工事ハ評ノ一月ヨリ六月ヨリ以內ニ着
手シ着手ノ日ヨリ二十四ヶ月以內ニ完成スルニ付

頁 三

1875

天災地変其他避クハカラン事 故ニ依リ期限因
着乎若クハ成切ニ難キ事情アルトキハ其事事由
詳見セ延期ヲ出願スルニ此場合ニ北海道廳
長官ニ於テ之ヲ理由アリト認メタルトキハ相當ノ延
期ヲ與フルコトアルニシ

第三條 埋立ノ方法ハ願書ニ添ヘタル仕様書ノ通アルニシ
第四條 埋立成切ノ上ハ鉄道用地及貯炭庫敷地ニ
併スルモノトス但芽出号埋立地ニハ乙号圖面ノ通り
運河ヲ設置シ且ツ道路及物揚場敷地ヲ設置
スハシ

第五條 前條ノ運河並道路及物揚場ハ成切ノ上其
面積ヲ査定シ毎償ニテ官有トスルニシ

第六條 埋立工事ハ本廳ノ監督ヲ受リハシ

1876

第七條 本廳ニ於テ工事ヲ監督スルニ方リ實地ノ利
 害ニ因リ設計及方法ノ變更ヲ命ズルコトアルニ此場
 合ニ於テハ會社ノ費用ヲ以テ工事ノ變更ヲ實施
 スルニ
 第八條 埋立成功ノ後ノラ害アル迄ノ間工事ノ爲メ公害ヲ
 生シ又ハ生ズル虞アリト認めラレトキハ何時ニテモ會社費
 用ヲ以テ之ヲ豫防セシメ又ハ賠償ニ付此人命令ノ條項ヲ
 改正増減シ若シクハ埋立工事ヲ停止シ又ハ禁止スル
 コトアルニ
 第九條 埋立成功後ノ出願ノ場合ニ相當監督ヲ遂ケ
 若シ其工事ニシテ不完全アリト認めラレトキハ賠償ニ付
 之ヲ改築若シクハ修理ヲ命ズルニ此場合ニ於テ會社ハ
 其改築修理ヲ拒ムコトヲ得ル

五
 五

1877

第十條 埋立免許權ハ許シテ得ルニテラカレハ擔保債付
ニ供シ又ハ他ニ轉移スルコトヲ得ズ

第十一條 此會令書ニ掲ケタル外本廳令ヲ以テ規定シタ
ル條項及將來法律會令若クハ本廳令ヲ以テ定
ムル所ノ條件ハ紛争之ヲ遵守スルコト

第十二條 着手ノ期限内ニ着手セズ又ハ成切ノ期限内ニ
成切セズ其他此會令書ノ條項ニ遵ハザルトキハ埋立
免許ノ効ヲ失フモノトス

第十三條 埋立免許ノ効ヲ失ヒ若クハ埋立工事ヲ禁止
ノ會令ヲ受ケタルトキハ會社ノ費用ヲ以テ官ノ指定シタ
ル期限内ニ原状ニ復スヘシ着工之ヲ怠リタルトキハ官
ニ於テ原形ニ復シ其費用ハ會社ヨリ追徴スル

1878

海面埋立仕様書

膽振國室蘭郡室蘭市街地之先

一海面 前日約五石七拾五石
奥行約五拾八石 但石造別紙繪圖面之通

此坪數方七十九石四拾五坪

内 線道部所属 四万六千石拾五坪
岩壁部所属 三万九千八百三十三坪

右仕様海面石垣下り大割栗石投入基礎と堅

代積込内ノ毛ノ木用ヒ合セ口重子

ニ高潮面上四丈上積骨子重

公五分ヲ附シ築込埋込表地ニ出

詳細ノ寫圖ノ結果ニ
テリ直申上ニテリ
テリ

頁

第

1879

1880

海面埋立仕様書

膽振國室蘭郡室蘭市街地之先

一海面 商口約五百七拾五名
奥行勢を扱ハ旨 但石造別紙繪圖面之面

此坪數六万七千九百四拾五坪

内 録通部所属 四万六千名拾五坪
出稼部所属 二万九千九百五拾五坪

右仕様沙面石垣下り大割栗石投入ニ基礎と堅

緻石面ニ坪沙拾八積以内ノモ、在用ニ合セ口重子

玄能措法五分ノ階ニ高潮面上四尺と積層子重

也割栗石上中四尺法五分ノ階ニ築造埋込表均ニ出

来ノ事

1879

1880

海面埋立仕様書

膽振國室蘭郡札幌通字エトツケレツ地先海中線

一海面埋立

延長千部五十九尺等
敷巾部五尺

但石造別紙繪圖面之通

此坪敷

面五部五坪五合部五尺
敷八百七拾四坪六合部五尺

古上儀在古石垣下夕大割粟石投入ニ基礎ト堅緻

是坪部拾何後以因山手ノ方面在坪部

合石口重子玄銅摺ヲ法五分ヲ附ニ高

積置テ量也割粟石海面ノ方上中

二尺法五分ヲ附ニ築造水按ニテ所在

是尺等ノ土管依也出来ノ事

折敷ノ其間ノ作具
ヲ前申書ノ如ク
行ハス

1882

1883

海面埋立仕様書

膽振國室蘭郡札幌通字エトツケ地先海中録

一海面埋立

延長千七百九十九尺

但石造別紙繪圖面之道

此坪敷

面五百七拾五坪

右仕様左石垣下夕大割栗石投入シ基礎ト堅緻

野面石海ノ方面是坪抄拾内積以内山手ノ方面是坪三

積以内ノ毛ノ相用ニ合石口重子玄網摺リ法也分ラ附ニ高

潮面上高五尺区積置少量也割栗石海面ノ方上中

甲尺山手ノ方上中ニ尺法也分ラ附ニ築造水按ニテ野至

是尺也、土管及伏込出来ノ事

1882

1883

北海道廳令第十一號

明治二十三年
四月二十四日

港内取締規則

第一章 通則

第一條 本則ハ身ニ奉ニ記載スル各港内及其海岸_地

ニ適用ス

第二條 左ノ事項ハ圖面ヲ添ハ所轄警官_署ヲ經

由シ本廳ニ願出_許シテ受クヘシ

一 船舶定錨標ヲ設置及改造スル事

二 棧橋架設又ハ標燈_等其他ノ目標ヲ建設スル事

第三條 左ノ事項ハ圖面ヲ添ハ所轄郡役所ヲ經_由シ

本廳ニ願出_許シテ受クヘシ

一 波止場物揚場石垣_板柵_等ヲ築造建設及改造ス

ル事

1885

清 算

才四條石ノ事項ハ圖面ヲ添ヘ所轄警署署長
願出許可ヲ受クヘシ

但函館港ニ於テハ才六項七項ハ仲達町ニ署
本文ノ手續ヲ為スヘシ

一警備船又ハ筏等ノ警備留杭ヲ建設改造及
修理ニ事

三施設費等ノ執行ニ事

1886
1887

防衛艦隊の艦隊

第一艦隊の艦隊

二波除杭石垣根留等ヲ建設改造及修理等事

三棧橋標燈其他ノ目標及波止物揚場石垣板

柵等ヲ修理等事

四海中浚渫又ハ土砂ヲ採掘等事

五遊泳場ヲ設クル事

六波止場物揚場及海岸地ニ夜以上諸事其他

ノ物品ヲ置ク事

七足代ヲ設クル事

八花火其他火技ヲ弄ス事

牙五條左ノ事項三日以前所轄艦隊司令部ニ届出ス

一船舶ノ進水式ヲ執行スル事

二端艇ノ競漕ヲ執行スル事

三施餓鬼ヲ執行スル事

1886
1887

船舶の連立ニ所轄警備署(函館港ハ仲濱町官署)ニ届出

其指示せん場所ニ碇泊スルモ其火薬及破裂質ヲ含有

スル物品ヲ搭載セシトスル時モ亦同シ

才十三條 港内ニ建物ヲ存ス又ハ波止場物揚場棧橋海岸

地等ニ車馬竹木其他ノ品物ヲ放置スヘカス

才十三條 棧橋又ハ堤防ノ害トせんハ場所若クハ護岸ノ建

設物花ニ浮標礁標其他標木等ニ船舶及筏等ヲ繫

留スヘカラス

才十三條 波止場物揚場ノ沿岸ニ濫ニ船舶及筏等ヲ繫

留スヘカラス

才十四條 他人繋キタル船舶及筏等ヲ解放スヘカラス

才十五條 水路ニ船舶其他ノ物件ヲ横ハ又ハ並列ニテ通航

ノ妨害ヲ為スヘカラス

1889

明治五年
前港ニ港内取
規則ヲ施行ス

第十八條 港内及波止場物揚場其他沿岸堤防地等

ニ塵芥尾礫炭灰其他禽獸ノ死屍等渾テ障害

物ヲ投棄スヘカラス

第十九條 棧橋又ニ波止場物揚場外ニ於テ濫ニ棄客及

荷物ノ揚卸ヲ為スヘカラス

但棧橋ハ手荷物外ノ荷物ヲ積ニ卸シテ得ス

第二十條 夜間燈火ナクシテ乗客及荷物揚卸シテ為

スヘカラス

第二十一條 港内ニ於テ濫ニ投棄スヘカラス

第二章 右港

第二十二條 函館港ハ山脊泊所南端ヨリ上磯郡上磯

村有川東流ニ至ル直線ヲ以テ其境界トス

第二十三條 根室港ハ余天島西端ヨリ陸地ヲテ及全島

其
三

東端より根室村字パニケモイ岬ニ至ル直線ヲ以テ其経界トス

第二十二條 根室港ハ流船ハ港内ノ中央ニ碇泊シ西洋形帆走船及日本形船ハ糸天島ニ沿テ碇泊スヘシ

第二十三條 小樽港ハ小樽郡惣碓村字平磯岬ヨリ高島郡古島村字麻岬ニ至ル直線ヲ以テ其経界トス

第三章 四罰例

第二十四條 本則才ニ條才三條才四條才五條才七條才十條才十條才十三條才十五條才十七條才十八條才十九條ニ違背シタルハ違警罪ヲ以テ

四罰セラレトス

但本則才明文アルモノニテ刑法及他ノ規程ニ正條アルモノハ各其法律規則ニ從フ

1891

評價書

膽振國室蘭郡札幌道

海軍省用地内

一原野地壹方七千九拾壹坪八合九勺五分

築道部所屬預地

此地價金三百七拾圓九拾九匁四厘

二坪二勺五拾九圓七拾五

此價用料十坪二勺全五拾九圓七拾五

右評價書也

評價委員

明治三十七年四月十五

室蘭外五郎書記 岡村 敬 印

左

三浦 純一 印

右原簿二條、膽字文

北海道廳區長 高山 龍之助 印

1892

14

甲申一三五号

北港在陸防中其五七七号

公有水面使用願之對其使用料及命令書

之義二付箇中

膽振國室蘭郡室蘭港ニ於テ北海道炭礦鐵道
 株式會社々長ヲ海面使用其他出願ノ件ニ關シ奉
 年五月四日第四五四〇号ヲ以テ海面使用ノ義ハ港
 内ニ端規則施行ノ地ニ付使用料及命令書ヲ
 要セテ御允可相成度越稟申ニ及置候事命令般
 度勢玉米兩司長ヨリ右ハ明治二十三年即有訓令第
 三十六号第七條ニ依ルハ中七ノ十九者並會ノ次人
 七有ニ即チハ別紙命令案ニ依リ御諾可成
 候様致度評價書勝手相添付段稟申ニ奉也

明治廿七年六月二日

要 覽

1894

海 軍

北海道廳長官北垣國道

内務大臣臨時代理

司法大臣芳川顯正殿

1895

命令書

北海道炭礦鐵道株式會社

社長 氏 若

明治 年 月 日 願 願 振 國 室 岡 郡 室 岡 港 於 棧
橋 架 設 爲 公 有 水 面 使 用 之 件 認 可 業 係 在 令 令
ヲ 遵 守 ス 云 々

明治 年 月 日

北海道廳長官

第一條 水面使用ノ位置及区域ハ本圖面ノ通ニ

シ其面積ハ千六百九坪五合六勺毫才トス

第二條 水面ハ棧橋架設ノ外他ノ目的ニ使用スルコトヲ

得ヤレズトス

第三條 使用期限ハ認可ノ日ヨリ滿五年トス

每 頁

1896

但満期、後引續々使用セント欲スルトキハ期限二月
前ニ繼續使用ヲ出願スルコト以場合ニ於テ支障ナシ
ト認メタルトキハ更ニ使用料額及期限ヲ定メ之ヲ認
可スルニ

第四條 使用料ハ毎年千坪ニ付金五圓ノ割ヲ以テ知
習スルニ

第五條 棧橋架設ノ方法ハ預事ニ添ヘタル仕様書、
圖ヲ見ルニ

第六條 公益ノ為メ又ハ官用其他必要アル場合ニハ何
時ニテモ毎價ニテ法令等ノ條項ヲ改正増減ニ又
ハ使用位置区域ノ變更更テ余ニ若クハ使用ヲ停
止又ハ禁止スルコトアルニ

第七條 棧橋架設ノ為メ公害ヲ生シ又ハ生スルノ虞アルト

1897

詔ヲタレトキハ何時ニテモ會社ノ費用ヲ以テ之レカ務功
 ヲ為サシメ若クハ仕様方法ノ変更ヲ命ズルコトアルヘシ
 第八條水面ノ使用權ハ擔保貸付ニ供シ又ハ他ニ轉移スル
 コトヲ得ズ
 第九條此命令書ニ掲ケタル外當廳命令ヲ以テ想定スル
 凡條項及將來法律命令若クハ當廳命令ヲ以テ定ムル
 所ノ條件ハ總テ之ヲ遵守スヘシ
 第十條會社ニ於テ此命令書ノ條項ニ違反シタルトキハ
 是レヨリ生シタル損害之ヲ賠償セシム可キハ勿論無償
 ニテ本件水面使用ノ詔可ヲ取消スヘシ
 第十一條第七條又ハ第十條ノ處分ニ依リ使用權ヲ喪ヒ
 又ハ該件ノ行使ニ変更ヲ求メシタルトキハ其區域内ニ
 現在セル棧橋ニ會社ノ費用ヲ以テ官ノ指定スル期

原

尾

1898

限内、除却シ系物、復スルモ若シ期限内除却セザル
トキハ官ニ移之ヲ除却シ其費用ハ會社ヨリ追徴
スヘシ

會社解散及債期限満了ノ時於テモ前項ノ箇
用ス

1899

室蘭港棧橋仕様書

膽振國室蘭郡室蘭市街地之先埋之地海面

一 長部寸三〇〇呎
中三程各八〇七本尺マテ

棧橋 七ヶ所

右仕様橋脚進ニ於て吹毎ニ蝦夷松長三拾尺乃至五尺
束口迄尺以上九左一バンドハ本乃至九本亦也ニ枕梁曰
角杭頭より長部吹毎至四分ノニドリフトボルトニテ亦付
行桁同尺四角架渡ボルトニテ付筋透及棟貫同尺
板長七寸具物釘ニテ是ヲ所ニ本ヲ打也亦板撤長部
厚部寸五寸板長ニテ西洋釘ニテ是ヲ枚九本ヲ亦也出
来

海軍

1900

評價書

膽振國室女園郡室蘭港内

一八〇有水面九千九百參拾七坪九合七勺

棧指架設及
繫船区域

此使用料全分九回五拾參參八厘

千坪三寸全毫同

右評價矣也

評價委員

明治三十七年四月十五日

室蘭外五郡書記 岡村 巖 下

全

三浦 純 一 下

右五本ニ依リ 膽字ス

北海道廳属 高山龍之助

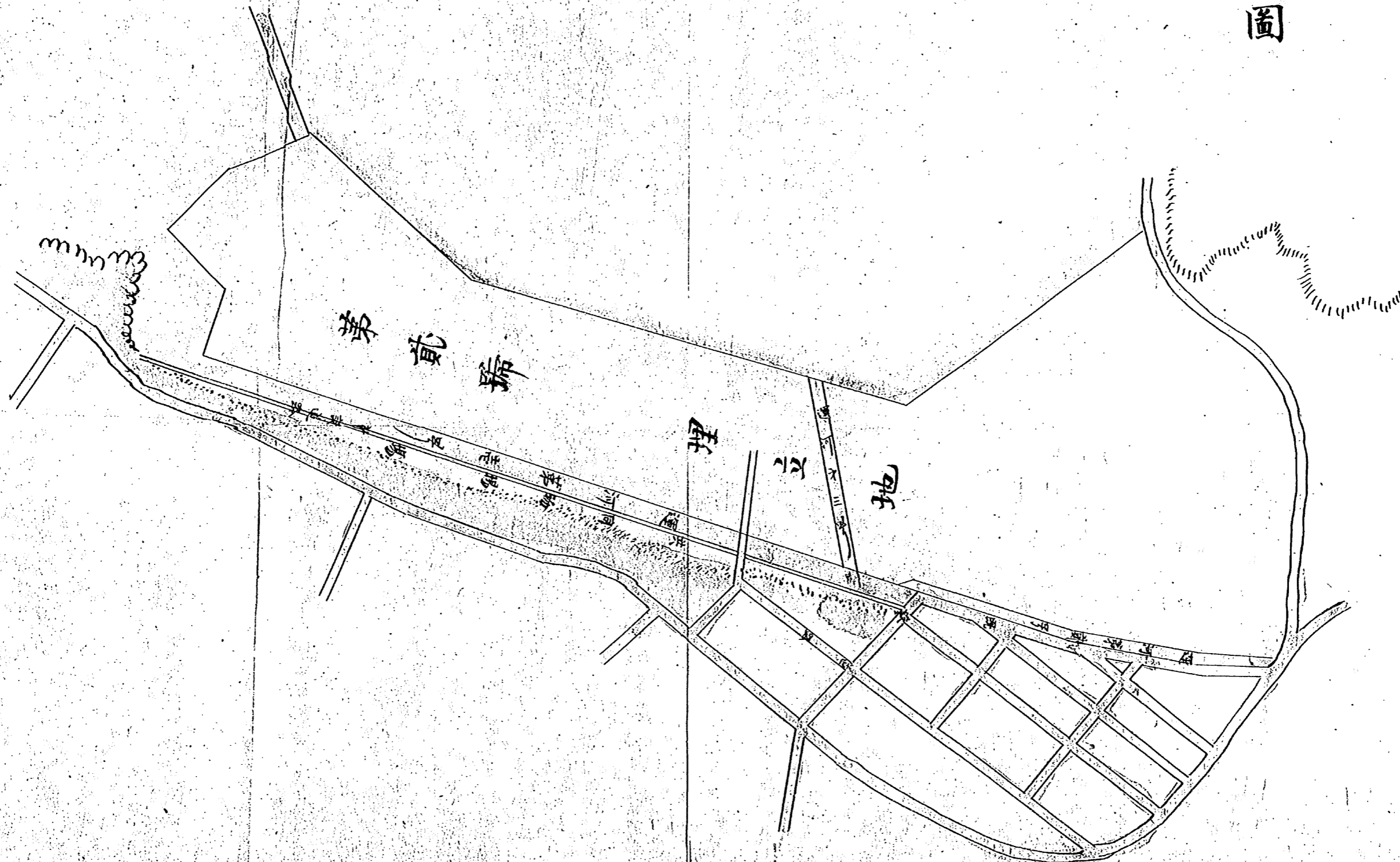
海 軍

北海道廳内部務部四五四〇号
附属
圖面
貳葉

100
Am

1902

乙 號圖



内務省 甲第 五五五号

明治廿七年五月十日

主任 治水課長

土木局長

縣治局長

北海道課長

庶務局長

地理課長

海軍省 用地使 用 是 公 有 水 面 埋 立

是 使 用 願 望 申 出

北海道廳

右 記 申 出 之 旨 會 據 相 伺 奉 也

櫻

本年五月四日 才四五四号 以下 海軍省 用地使

要

覽

1904

用花ニ公有水面埋立花ニ使用願ノ事直申相成案
該面申書中海面使用ノ義ハ港内取締規則施
行地ニ付使用料及命令等ヲ要セリタルハ廿三年當省
訓令第ニ千六百九号ニ準拠セラレタリモノト存案
吾本件ノ如キ一會社ニ於テ營利ノ目的ヲ以テ使用スル
モノハ該訓令第七條ニ依拠スルモノニ付使用料ヲ付
命令書書據及通知送付等事又海面埋立命令
書第ニ千三百三號ニ據テ方法ハ願者ニ依リ各様帳簿
ヲ凡ハシトアリ通知ニ右様帳簿送付等事調査上ニ及
テ官保セテ所回送者ノ如キ事命令書中
付箋ノ上所訂正相成度此段及照會等也

年月日

土木局長

庶務局長

1905

北海道廳長官記

逕于港内右錦規則參考致度吾間寫一通而
送付未成度言也

海軍

1906

内務省訓令第三十号

前畧

第七條 旧慣ニヨリテ捕魚採藻ノ業ヲ営ムノ外公有ノ水面ヲ其終使用セシムコトヲ出願スルモノアルトキハ前條々ノ例ニ準シ命令書ヲ下付シテ之ヲ免許スヘシ但本條ノ場合ニ於テハ相当ノ料金ヲ國庫ニ納メシム可シ

中畧

第九條 水上ノ取締ニ関スル規則ニヨリテ公有水面ノ使用ヲ許スル類ハ命令書ヲ下付スルニ及ブ又使用料ヲ納メシムルニ及ハス公衆ノ障礙ナキニ於テハ無料使用ヲ許スコトヲ得

以下畧

海

軍

1907

内務省土木局長古市公威殿

逕に港田所錦規則寫及送付各条は領
収取交換所錦規則に依りハ橋樑架設出
願ノ節ハ其規則ニ準據セラルルハ勿論ナレモ
全規則ニ有リ之ヲ架設スルモノヲ令セラルルモノ
ハ之ニ随テ今回炭礦鐵道會社ヲ出願
ノ如キモ明治廿三年ノ省訓令及中野号
才九第ニ依リハ之ノ如クハ之ヲ架設スル
得共所由法令中ニ事件ノ如キ一會社ニ於
テ營利ノ目的ヲ以テ使用スルモノハ之ト有
リ右文ニ依リテハ公共利益若クハ公益上橋
樑架設ノモノハ命令書ヲ以テ使用料

1909

日徴取セザルニモ善友ナク操ルルニ無異ニ
テ物トモハ訓令集三卷六号第九條ノ如
文ト善盾ニモ操被ル者難諒解致ス
条右ニ如クハ九ノ趣旨ニ首ニモ善友
善友長年ニ首ニモ善友ニ至急何分
ノ即解示ヲ得交出ル中添書也

好

真

1910

甲第五一五号

廿七年五月十六日

主任沼水課長

山本菊長

公有水面使用ノ義ニ付同令ノ件

北海道廳

右ニ付左ニ回答按相同意也

按

海軍省用地使用等ノ件ニ付、曩ニ及照會
置、英曆六月二日第五六五七号ヲ以テ回答、
越了、然レ、該回答御、追書ニ公共組合
若クハ公益上機務架設ノ義ニ付、同令ノ

1912

趣に有る等處古ハ材料ニテ公眾ノ用ニ供スル爲
メ槇橋ヲ架設スルニ當リ使用料ハ徴收ス
ニ及ハカレ義ト存案得共申合書ハ所錦上訓令
第三十六号第七條ニ準ニ下付ス義ニ有る等而シ
テ談訓令第九條ハ一人ノ用ニ供スル槇橋ヲ
設クルノ類ヲ水上所錦ニ關スル規則ニテテ許可ス
ル場合ノ規定ニシテ本條ハ概子簡易ノ使用ヲ
許可スルノ条項ナルニ付決シテ矛盾セカレ義ニ有
之其間右ニテ了知スル爲此段及回答意也

年月日

土木局長

北海道廳長官記

1913

甲第五一五号

廿七年六月十三日

主任 治水課長

土木局長

海軍省用地使用及公有水面埋立

並ニ使用額ニ付指示申

北海道廳

右ニ付左ニ照會按相伺多也

按

海軍省用地使用及公有水面埋立並ニ使用

額ノ件ニ付是表ニ及照會^ニ貴廳本月二日第五六

五七号ヲ以テ回答ノ趣ヲ承知^スニ該回答ニ依

1914

ハ海軍省用地ハ一ノ年千坪ニ付金五拾五圓ニ付
シテ水面ノ使用料ハ千坪ニ付金五圓ト有テ
敷普通水面ヨリ土地ノ方高價ナルニ本件ニ付
テハ前記ノ通り土地使用料ノ方余程低廉ナル
ハ如何ナル義ニ可有テ哉詳細函告致交此段
及照會ニ有也

年月日

土木局長

北海道廳長官記

1915

室蘭港海軍省用地並に水面使用料の徴に付甲
才九九号ヲ以テ照會之趣ヲ蒙右同省用地千坪
金部控電表七重トセシハ同港札幌道字母在細地
々價是及金六圓五拾五兩千坪並に同七拾五
ニシテ當座ニ於テ土地之使用料ハ地價百分之一
ヲ以テ標準リルル規定ナルカ故ニ右ニ割合ニテ
並亦出シタルモノニ有シ又水面使用料千坪金五圓
トセシハ同港ニ於テ前年海田某棧橋架設ノ際
水面使用料百坪拾五兩ニシテ此比準ニ依リ
評價シタル旨評價委員中五ニ有シ其条右等
承知申事至此段及水面等也

九七年六月廿五日

1916

北海道庁長官小畑國造

出向局長柳澤敬吉殿

1917

内務省秘乙第285号

廿七年二月十三日

主任 治水課長

大臣

事務長

次官

縣治局長

北海道課長

庶務局長

地理課長

室蘭軍港用地貸下ノ義ニ付上申

室蘭港海面埋立ノ義ニ付前申

北海道廳

右海軍省用地借用及海面埋立ノ件ニ就テハ豫テ
同省ノ照會中、処今般子成ノ適回答有テ該回

1918

答：依レハ海面埋立ノ欲ハ着支無之又使用ノ儀モ他
 日必要ニ際シ鉄軌等ヲ撤去ニ返付スヘキ条件ヲ
 付シ田省用地ノ修保用セシメラルニ於テハ支障無之
 トノ趣ニ有之然テハ曾テ陸軍省所轄東京市麹
 町区飯田町甲自地内ヲ甲武鉄道ノ敷地ニ大坂市
 東区杉山町外敷テ可地内ヲ大坂鉄道敷地ニ使
 用許可相減居有例ニ有之由条使用埋立共
 許可セラルヘキモトシ左ニ北海道廳長官ハ由条廣
 兩局長名ヲ以テ道牒案取調込段相伺多也

通牒案

明治廿六年七月一日付上申室蘭軍港用地炭鑛鉄
 道會社ニ使用セシムル件 於今年九月廿一日付前中
 室蘭港海面埋立ノ件 海軍省用地使用ニ就テハ

1919

其期間ヲ三十年トシ其間ト雖凡因省ニ於テ必要ヲ生シ
 タル場合ハ何時ニテモ無償ニテ原状ニ復シ返地スルコト
 及使用料ヲ徴収スル旨ノ条件其他必要ノ事項
 ヲ記載シタル命令書ヲ貸シ又海面埋立ニ關シテハ
 廿三年專省訓令第三十六号ノ手續ヲ盡カレ直後
 セラレニ於テハ何カノ詮議可相成ト存案条右手續
 御運ノ上更ニ上申相成可然依命此段及通牒取
 也

年月日

庶務局長

お末 局長

北海道廳長 友光

追テ本所上申ニ對シテハ別ニ指令不被及取
 此段申添取也

海軍

1920

2

秘乙第ニ八五号

室蘭軍港用地貸下ノ義ニ付上申

室蘭軍港用地北海道拓殖上ニ大關係ヲ有シ重
義ハ郷キニ略申上テ處尚圖面ヲ以具申可致者
所指示ニ由リ別紙海軍者ヲ相廻リ候畧圖ヲ
寫シ概畧圖中ニ其理由ヲ記載シ供電見ハ此
度當港ニ出張實地ニ自點檢致シ候處實ニ軍
港豫定ノ通實實施相成候時ハ圖面ニ記スル如ク當
市街地ト船舶ノ錠泊久ク申地ハ全ク軍港ノ為メニ遮断
セラレ可申畧初道ニ於テ市街移轉地ト認メられ
地ハ潮水ノ浸入ヲ受ルノミナラス年々低下スル泥炭地ニシ
テ普通堅固ナル家屋ヲモ築造シ能ハザル地質ニ付
可詮停車場及ヒ市街地ト為スル申地ニ無シ况ニ

要

真

1921

ヤ飲用水ニ乏シ且又海面ハ遠淺ニシテ小船ヲモ不可
入加之東西ノ風烈敷解船ノ運用ヲ妨害シテ到底
高港ト爲スヘキ場所ニ非ラズ如此地形ノ實況ニ付
此度炭鑛鐵道會社カ鐵道ヲ延長ニ棧橋ヲ
架設シテ其業ヲ利爲メ海軍省用地拝借ノ
願ヲ指出シタルハ萬々不得已ニ出タル次第ニ有之莫
万一之レヲ許シ之時ハ唯炭鑛鐵道會社ノ
利害ニ止カラズ北海道東部開拓事業ノ上ニ於テ其
得失ノ關係亦ナカラス實ニ憂慮ニ不堪次第ニ有之
莫右ハ海軍大臣ニ詳細具申致シ置キ莫義ニ
既。海軍省ヨリ内務省ニ御高議中ノ趣ニ付何
卒速ニ炭鑛鐵道會社願意ヲ許シ之ニ相成候
鐵道活用ノ目的ヲ達シ北海道拓殖上直接間接

1922

ニ其利益ヲ受テ拓殖ノ進度ヲ助ケシノ候採特別ノ御
詮議相成度此段上申奉也

明治廿六年七月一日 北海道廳長官北垣國道

内務大臣伯耆尉井上毅首殿

此ノ海軍御用地押借願許可ノ上ハ僅ニ三拾万
円余ニテ十分線路延長ト棧橋架設トノ工事
ヲ落成可致而會社力之レ由リテ年々四萬余ノ
準益ヲ得テ莫事ハ確實ナル計業ノ趣ニ有
テ

1923

室蘭港鐵道線路延長設計説明書

一 線路ノ位置ハ平面圖ニ示ス如ク且トツケレツテヨリ海軍印
用地ニ達スル海中線路ハ兩側ニ石垣ヲ築キ以テ築堤ニ海
軍印用地内ハ山手ノ地位ヲ撰ヒ地盤ノ高低ハ捨テ均ラ
低敷ハ盛土シシ高処ハ切取リ佛改ハ隧道ヲ穿テテ通
過シ室蘭市街前ノ埋立見込地ニ達ス

一 線路ハ築堤馬踏面幅十五尺切取回二十一尺トシ兩側
ニ排水溝ヲ設ケ勾配等ハ断面圖ニ示ス如シ

一 築堤人道等ヲ横断スル処ハ敷板ニテ完全ノ踏切路
ヲ設ク

一 室蘭埋立見込地ハ海面ニ石垣ヲ築キ埋立ニ高潮面上
四尺ノ高トナシ平面圖ニ其梗概ヲ示ス如ク幾多ノ復線
ヲ敷設シ乗客待合所高物庫給水塔轉車台等

1925

停車場ニ必要ノ社装置ラナシ貯炭庫ヲ作り棧橋ヲ架
設ス埋立地ノ面積ハ停車場用地及貯炭場用地ヲ合
セテ六萬七千坪ナリ
一 鐵道及貯炭場等ニ要スル工費概算ハ別冊ノ如シ

1926

室蘭港鐵道延長目論見線花野岩場

設計工費概算書

一金四拾四萬圓

内 全參拾萬圓千六百圓

鐵道部

全拾參萬八千四百圓

炭礦部

此譯

鐵道部

一金六百四拾圓

切取千四百坪

一金參千圓

築堤參千坪

一金四千五百九拾圓

海岸石垣五百四拾坪

一金參百圓

口儿ヤ九十坪

一金五百七拾圓

依植五百五拾坪

一金五萬五千元圓

隧道千三百尺

要

資

一金五萬九千圓

鐵道延長三哩諸費

一金六萬五千圓

棧橋二千三百尺

一金貳千八百圓

測量器壹千所

一金壹萬八千圓

浮標 六ヶ所

一金七萬八千圓

埋立地七万八千坪

一金壹萬貳百圓

全石垣千貳百坪

一金參千五百圓

轉車台給水器等自屬物

一金參千圓

待合所荷物扱所花敷地均等
貳式

一金千圓

諸費

計金參拾萬壹千六百圓

炭礦ノ部

一金六万七千圓

埋立由紳立六万七千坪

一金壹万貳百圓

全押岸右經千貳百坪

一金六万圓

貯炭場八千坪

一金五百圓

諸建物

一金七百圓

諸費

計金拾三万八千四百圓

海

軍

1929

3